

2022年度 松山大学 経済学部  
一般公募推薦編入学・指定校推薦編入学試験

◆小論文◆ (60分、800字以内)

次の文章は、『毎日新聞』2021年10月10日の記事「気候危機 未来奪わないで」の一部である。これを読んで設問に答えなさい。

【記事】

国会議員が居並ぶ中、りんとした声が国会議事堂（東京・永田町）の脇に建つ衆院分館の部屋に響いた。

「私は皆さん方、大人に『あなたたちの未来と命はない』と宣告されたように感じました。絶望しました。気候危機から国民の命を守るという責任を放棄したように思えます」「気候危機は既に日本を襲っています」。地球温暖化対策推進法をどう改正すべきかを議論していた4月23日の衆院環境委員会で、鹿児島大学2年のNさん（20）は15分間にわたり危機感を訴えた。

Nさんは、温暖化対策の強化を求める全国的な若者の運動「Fridays For Future Japan(フライデーズ・フォー・フューチャー・ジャパン)」の中心メンバーだ。運動の実績を買われ、国の環境やエネルギー分野の会合に参加する第一人者の専門家らとともに、委員会に招かれた。

その前日、菅義偉首相（当時）を本部長とする政府の地球温暖化対策推進本部は「二酸化炭素など温室効果ガスの排出量を、2030年度までに13年度より46%削減する」という新しい目標を決めたばかりだった。これまでの「26%削減」から大幅な引き上げ。それでもNさんには不十分だと感じ、思いの丈を語った。

「フライデーズ・フォー・フューチャー（未来のための金曜日）」。元々は、スウェーデンの環境活動家、グレタ・トゥーンベリさん（18）が15歳の時に始めたひとりぼっち運動だ。毎週金曜日、温暖化の対策が徹底されないことに抗議するため、学校を休みスウェーデンの国会前で座り込みを続けるストライキをした。

「大人は子どもたちを愛している言いながら、その目の前で子どもたちの未来を奪っている」。こうした訴えが、若者の心に響いた。各国の若者らによる路上デモや、ネット交流サービス（SNS）を通じた抗議運動につながり「フライデーズ・フォー・フューチャー」は1年足らずで世界中に広がった。うねりは日本の若者にも波及した。

「フライデーズ・フォー・フューチャー・ジャパン」は路上やオンラインでの運動だけでなく、Nさんらメンバーが小泉進次郎環境相（当時）と3度も意見交換するなど、政治の場でも存在感を発揮し始めている。（以下、略）

【設問】

「気候危機」に対して、経済学は何ができるのでしょうか。それとも、何もすべきではないのでしょうか。あなたの考えを、理由を付して、800字以内で述べなさい。